青梅市文化財ニュース　第１１３号

平成　９年　３月１５日

発行　青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土資料室

（青梅市駒木町 1-684 ℡0428-23-6859）

遺跡が語る歴史の空白

青梅市を流れる主な川に、多摩川、霞川、成木川があります。これらの川に沿って、原始・古代の遺跡を現代別に点を落としていくと、その分布の推移におもしろいことがわかります。それは川ごとに、そして時代ごとに青梅市の原始人たちの生活の動きが推測できるからです。

昭和４０年代半ばごろから発掘調査が急激に増加し、現在に至っている霞川沿いの遺跡においては、旧石器時代から縄文（後期まで）、弥生、古墳、奈良、平安時代と、河川に沿う台地上に単独で、もしくは重複して、多くの遺構の存在が確認されています。これは、広大な台地と霞川が作る湿地帯が及ぼす生活条件（住環境や稲作等の農耕における地理的環境）がちょうど良かったものと推測されます。霞川沿いではこのような歴史全般において、その生活の存在が集落を伴って残されています。

これに比べ、多摩川はどうでしょうか。多摩川は、山間を蛇行しながら流れ下り、川が浸食した土砂の堆積を河岸段丘の形成で残しながら部分部分で台地を形成しています。

多摩川沿いの遺跡全般を見てみると、旧石器時代から縄文時代まで各地域に転々と存在し、特に、縄文晩期（今から２５００年前）の遺跡は市内ではただ１か所となってしまいます。この晩期を最後に、何故か次に続く弥生時代からの遺跡がばったりと無くなってしまい、その後に続くのは、平安時代（９世紀半ば）になってしまうのです。それも、特に広大な土地を選ぶわけでもなく、また、平坦地に限ったわけでもないまま、散在しているのです。

このような事から、約５００年の空白後、霞川沿いでは新たに荒川を遡って来た人々が生活を始めたという事が考えられます。時代的には弥生時代も中期からで、土器などの粘土分析によって荒川下流に産する粘土を使っていることなどから、人々と共に、物が遡ってきたと推測されます。そして、多摩川沿いでは、人々の往来はあったとしても、生活そのものは一時的に無くなってしまい、弥生時代から平安時代まで前まで、約１０００年以上に及ぶ歴史の空白が考えられるのです。

こうして、霞川沿い、そして多摩川沿いにおける遺跡の存在は、原始時代における青梅市の歴史年表に空間が有ることを教えてくれるのです。

原始・古代の生活は、たとえ平安時代にあっても、中央でいう雅やかな世の中ではなく、ま

だまだ竪穴住居での暮らしです。それらの地中に残された情報によって、年表の空白の謎は解明されるかもしれません。皆さんの拾った土器のかけら１つで歴史が塗り変わるかもしれないのです。そんなところが、歴史を楽しめる一つのヒントだと思います。（文責　鈴木）

・ **郷土博物館講座『国宝赤糸威鎧の歴史的背景と構造　－赤糸威鎧（復元模造）完成報告会－』**を講師に青梅市文化財保護審議会委員　斎藤慎一先生、甲冑師　西岡文夫先生を迎えて、平成９年３月３０日（日）青梅市民会館にて、開催します。
申し込みは、お早めに郷土博物館（☎２３－６８５９）まで。